

地上人類への最高の福音

「シルバーバーチの霊訓」

(198)

▼「死後も地上の同じ場所に留まるのでしょうか。それとも、まったく新しい別世界となるのでしょうか」

「宇宙はたった一つです。が、その中に無数の世界が存在するのです。生命はたった一つです。が、それも無数の段階があるので。こうした霊的実在の問題を扱う際に直面するのが、言語の不便さです。大ざっぱで、ぎこちなくて、意を尽しがたい、ただの符号にすぎないものを使用しなければなりませんので、わたしの本意が伝わりにくいのです。

生命は一つです。宇宙は一つです。そこには限界というものがありません。ここが宇宙の端っこですという、最先端がないのです。ですから、皆さんの視界から消え去った過去の人たちは、今もあなたと同じ宇宙の中で生き続けているのです。しかし、界層が異なります。波長の次元が異なります。次元の異なる意識の中で生活しているのです。それでいて、あなたと同じ場所にいるのです。その肉眼に見えないだけです。それはちょうど、あなた自身は気がつかなくても、あなたは今わたしの世界である霊界にいるのと同じことです。

生命のあらゆる側面が一つに融合しているのです。仕切り線とこのようなものはありません。その中に物的な側面と霊的な側面とが存在し、同じ場所で融合しているのです。

たとえばみれば、無線の周波のようなものです。あなたのいらっしゃる同じ位置に、周波数の異なる電波が無数に存在するので

す。宇宙空間に充滿しているのです。が、そのうちのどれをキャッチするかは、受信機の性能一つにかかっています。それと同じで、あなたは今の段階では物的波動に制約されています。それしかキャッチできないのです。霊視能力者というのは同じく光の波動でも物的なものとは次元の異なる、より精妙な波動をキャッチできる人のことです。霊聴能力者というのは、同じく音波でも物的なものを超えた、より繊細な波動をキャッチできる人のことです。すべてはその人の性能にかかっております。

さて、死後のことで、ぜひとも知っておいていただきたいのは、肉体を捨ててこちらの世界——生命の別の側面、いわゆる霊の世界へ来てみると、初めのうちは戸惑いを感じます。思いも寄らないことばかりだからです。そこで、しばらくは地上世界のことに関心が引き戻されます。愛情も、意識も、記憶も、連想も、すべてが地上生活とつながっているからです。そこで、懐かしい場所をうろつきますが、何に触っても感触がなく、誰に話しかけても——我が家でも会社でも事務所でも——みんな知らん顔をしているので、一体どうなったのだらうと困惑します。自分が「死んだ」ことに気づかないからです。しかし、いつまでもその状態が続くわけではありません。やがて霊的感覚が芽生えるにつれて、実在への自覚が目覚めてまいります」

▼「昔のインディアンは、儀式のようなことをして雨を降らせることができたが、それには霊界の人はどのように関係しているのですか。何か関係があるのですか」

「関係ありません。心霊的法則サイキックローと霊的法則スピリチュアルローとは少し違うのです。まったく同じではないのです。どちらにでも言いかえること

ができると思っている人がいますが、同じものではありません。かつてのインディアンは、地上の物的現象に関係した心霊的法則について、よく知っておりました。純粹に物的な現象です。そして、腕のいい熟練したまじない師は、儀式によってその心霊的要素を引き寄せる能力をそなえていたのです。

靈視がきくといわれる人でも、靈界のものは何も見えない人がたくさんいます。この場合は、心霊的能力の一部にすぎません。ですから、心霊的法則の支配をうけ、心霊的な能力で見るだけで、その背後に靈界の存在とのつながりはありません。他界した人の姿も見えません。肉眼に見えない遠くの情景は見えます。予知もできます。未来をのぞいたり過去の出来事を当てることもできます。ですが、そうしたことが靈界と全然つながっていないのです。生まれながらに備わっている、純粹に心霊的な能力なのです。

▼「死後の世界の界層^{レベル}について教えてください。シルバーバーチさんはよくその違いについて話しておられますが、どういう違いがあるのですか」

「成長の度合が違うのです。しかし、その違いは地上のように、ものさしで計れるものとは違います。もしわたしがポール君に、愚かな人と賢い人、あるいは、欲張り^{レバ}りと聖人との違いを寸法で計りなさいと言っても、そんなことはできませんね？」

しかし、それぞれの界に住む靈の成長には大きな差があるので、こちらでは魂の成長に応じた界層、むずかしい言い方をすれば、その人の知性と道徳性と靈性の程度に合った世界に住むようになります。界層の違いは、そこに住む人の魂の程度の違いだけで、靈性が高ければ高いほど、善性が強ければ強いほど、親切心

が多ければ多いほど、慈愛が深ければ深いほど、利己心が少なければ少ないほど、それだけ高いレベルの界層に住むことになります。

地上はその点違います。物質界というレベルで生活しているからといって、みんなが精神的に、あるいは靈的に同じレベルの人たちばかりとはかぎりません。身体は同じレベルのもので出来あがっていますが、その身体が無くなれば、魂のレベルに似合った界へ行くことになります」

▼「もう少し聞きたいことがあります。この地球もそういう界の一つですが、それとも特別なものですか」

「いいえ、特別なものではありません。地上世界も靈的な世界の一部です。なぜかと言うと、靈の住む世界はぜんぶ重なり合っているからです。宇宙に存在する生活の場のすべてが、互いに重なり合い、融合し合っており、靈界とか幽界とか物質界という言い方は、一つの宇宙の違った側面をそう呼んでいるだけです。ポール君はいま物質界にいますが、同時に幽界にもつながっているのです」

▼「これまでいろんな人が神についていろんな説き方をしているみたいです。それぞれに違っており、これだと得心のいくものがないのです」

「その通りなのです。忘れてならないのは、人間はつねに成長しており、精神の地平線が絶え間なく広がっているということです。言いかえれば、境界線が取り除かれていきつつあるということです。知識が進歩すればするほど、宇宙そのものと、その宇宙

に存在するものについて、より大きな理解力がもたらされます。太古においては、人間はまわりの環境についてほとんど知識がなく、自然現象についてはまったく理解していなかったために、何もかも神さまの仕業しわざにしておりました。その神さまについても人間を大きくしたような存在としてしか想像できませんでした。それが「いけにえ」の思想を生む元になりました。雷が鳴り、稲妻が走るのを見て、神さまが怒っておられるのだと思い、その怒りを鎮めるために、いろいろと生きたものをお供えするようになったのです。

そうした野蛮な小さな考えも次第に大きく成長し、人間は無知の暗闇から脱し、迷信の霧を突き抜け、知識の夜明けを迎えて、宇宙の根源はどうやら人間の想像を超えたものらしいということに気づきはじめました。しかし、だからといって、古い概念がそう簡単に消えたわけではありません。何かすごく大きな男性のような姿をした神さまが宇宙をこしらえたのだという概念が、何十世紀もたった今でも存在しております。

さて、わたしはその概念を一步進めて、宇宙を創造しそして支配しているのは、男性神でもなく女性神でもなく、とにかく形ある存在ではないと説いているのです。人間的な存在ではないのです。宇宙は法則によって支配されており、その法則は規模においても適用性においても、無限なのです。それは無限の愛と叡智とから生まれたものであり、したがって完ぺきであり、過ったり失敗したりすることがないのです。

わたしは生命とは霊のことであり、霊とは生命のことであり、初めもなく終わりもないと説いております。霊を物質の中に閉じ込めてしまうことはできません。物質というのは霊のお粗末な表

現でしかありません。物質界に生きる人間は、視覚と聴覚と嗅覚と味覚と触覚の五つの感覚でしか物事を判断することができませんから、その五感を超えた生命の本質を理解することは無理なのです。

そうした限界の中で生きているかぎり、その限界の向こう側にあるものが理解できるわけがありません。そこで次のような結論となります。すなわち宇宙は自然法則によって表現されていること、その法則の背後にある叡智は完全であること、しかし人間は不完全であるために、その完全さを理解することができない、ということ。人間が一個の形をもった限りある存在である以上、形のない無限の存在を理解することはできないのです。これはとても難しい問題ですが、少しでも理解の助けとなればと思って、申し上げてみました。

人類のすべてが——地球という一個の天体上だけではありません。数え切れないほどの天体上の人間的存在すべてがそうなのですが——わたしのいう大霊、みなさんのいう神ゴッドの一部を構成しているのです。大霊とは全宇宙の霊の総合体だからです。これならわかるでしょう？」

▼「お二人のこれからの人生が日向ひなたばかりだとは申し上げられません。曇りの日もあることでしょう。時には雨にうたれることもあるでしょう。困難なことがあるでしょう。試練に立たされることもあるでしょう。」

人生は一本調子のものではありません。色彩もあり変化もあります。障害に出会うことでしょう。何もかもうまく行く楽しい日々もあれば、すべてが絶望的に思える暗い日々もあることでしょう。

う。そうしたさまざまな体験の中でこそ、性格が培^{つちか}われるのです。人生を形づくっているさまざまな体験の中で培われるのです。

もしも人生が初めから終わりまでラクに行ったら、もしも乗り切るべき困難もなく、耐え忍ぶべき試練もなく、克服すべき障害もないとしたら、そこには何の進歩も得られないことになります。レースは競い合うからこそ価値があるのです。賞はラクには貰えず、一生けんめい頑張ったあとにいただくから価値があるのです。

そういう価値ある人間になるように努力しなさい。この世に克服できない悩みはありません。ですから、悩んではいけないのです。征服できない困難はないのです。力の及ばないほど大きな出来事は何一つ起きないのです。

一つ一つの経験から教訓を学ぶことです。難しいと思った時は、ひるまず自分にムチ打つのです。それだけ前より強い人間となります。自分が霊であること、それが肉体を通して表現しているのだということ、そして、自分という永遠の霊に傷を負わせたり、害を及ぼしたりするものは、決して生じないということを忘れないことです。

世間でいう「成功者」になるかならないかは、どうでもよいことです。この世的な成功によって手に入れたものは、そのうちあっさり価値を失ってしまいます。大切なのは、自分の霊性の最高のものに対して誠実であること、自分でこれこそ真実であると信じるものに目をつぶることなく、ほんとうの自分自身に忠実であること、良心の命令に素直にしたがえることです。

それさえできれば、世間がどう見ようと、自分は自分としての最善を尽したのだという信念が湧いてきます。そして、いよいよ地上生活に別れを告げる時が来たとき、死後に待ちうけている生

活へのそなえが十分にできているという自信をもって、平然として死を迎えることができます。これが、わたしからのアドバイスです」

▼「私がいつも関心を抱いているのは、私たち治療家に何が治せるかではなくて、どうしても治せずにいる病氣のことです。どうすればより多くの病氣を治し、どうすればそちらの世界の霊医との協調関係を深めることができるでしょうか」

「われわれは偉大にして遠大な目的に向かって協力し合っております。その目的とは、薄幸の人々、虚弱な人々、苦痛にあえぐ人々、寄るべなき人々、悲嘆に首をうなだれ、胸のふたぐ思いをしている人々に、少しでも援助の手を差し伸べてあげることです。霊の力は人間を媒体として注ぎ込むチャンスをつかっております。そのチャンスを見つけると、病氣の場合であれば治療力を見せつけることによって、人間の協力さえ得られれば見えざる世界の威力と光明とをもたらすことができることを示します。

霊の力はすなわち生命力です。生命があるのは霊があるからこそです。霊は生命であり生命は霊です。この途轍^{とてつ}もなく広大な宇宙を創造した力も、あなたがたを生かしめ、これから後もずっと生かしめていく力と同じものです。又、あなたがたが愛し合い、物を思い、心を馳せ、判断し、反省し、決断し、勘案し、熟考し、靈感を受け、人間的情感の絶頂からドン底までを体験させてくれる力、それは霊の力なのです。

あなたがた一人ひとりが大霊であり、大霊はあなたがた一人ひとりであります。程度の差があるだけで、その本質、実質においては同じです。人間は言わばミクロの神です。その力が病

人を癒すのです。それを分析してお見せすることはできません。何で出来ているかを説明することもできません。わたしに言えることは、それが無限の形態をとって顕現している——なぜなら、生命は無限だから、ということだけです。

霊媒現象のすべてに共通した問題は、その霊的エネルギーのコントロールです。どのエネルギーをどれだけ発現できるかは、その時の条件一つにかかっています。言いかえれば、その霊媒の有する資質と、それをより大きく、より効果的にするための修行を、どこまで心掛けるにかかっています。わたしたちの側においても、常に新しいエネルギー、新しい放射線、新しい可能性を徐々に導入しては、それを実験しております。

ですが、それも、霊媒の身体的・精神的・霊的適性によって規制を受けます。受容力が大きければ、それだけ多くのものが導入されます。小さければ、それだけ制限されることになります。

霊力そのものは、自然法則による以外には何の制約も受けません。自然法則の枠組みから離れて働くことはできないのです。が、その枠組みというのが途方もなく広範囲にわたっており、これまでに地上の霊媒を通じて顕現されてきたものよりはるかに多くのものが、いまだに顕現されずに残っております。

わたしが指摘したいのは、多くのまじめで信心深い人々が、神の力はバイブルに記録されている古い時代にその全てが顕現されつくした、と思い込んでいるのですが、それは間違いだということです。啓示はそれ以来ずっと進歩し続けております。現代の霊媒を通して顕現されている霊力の方が、過去の時代のものに較べて、はるかに強大です。

さて、あなた（ハリー・エドワーズ）は豊かな恩恵に浴してお

られるお一人です。あなたのすぐ身のまわりで働いている霊の姿をご覧になる霊視力があればよいのだが……と思われるかもしれませんが。背後霊の存在に確信を抱き、あなたを導く霊力に不動の信頼を置いておられることは申すまでもないのですが、その背後が誰で、どんな人物であるかをご覧になれば、もっともつと自信を持たれることでしょう。

▼「そうおっしゃると思っていました。これは実は重大な問題であり、あなたにとつても意外に思えることも含まれております。心霊治療の仕事の大切な要素は、身体を治すことではなくて、魂の琴線にふれさせることです。魂を目覚めさせ、身体への支配力を大きくさせ、生きる目的を自覚させ、霊的存在としての本来の自我を表現させることに成功すれば、これは治療家として最大の貢献をしたことになります。

そのことの方が身体を治すことより大切です。それが治療家としてのあなたの努力の中でも、永遠に残る要素です。人間は精神と肉体と魂とが一体となったものです。これに、その三者が互いに絡み合って生じる、プラスアルファの要素もあります。その影響も忘れてはなりません。

病氣というのは、その大半は主として精神と肉体と魂との間の連絡が正しく行われていないことに起因しています。正しく行われていれば、つまり完全な一体関係が保たれていれば、健康と安定性と落着きと機敏性をそなえています。もっとも、そういう人物は地上では滅多にお目にかかれませんが……

さて、あなたのもとを訪れる患者は、その人なりの霊的成長段階にあります。人生という梯子の一つの段の上に立っているわけです。それがどの段であるかが、その人に注がれる治癒力の分量

を決します。それを決する要素の一つが、わたしのいうカルマ的負債です。

その負債が大きすぎて、あなたにも手の施しようのない人がいます。肉体を犠牲にする、つまり死ぬこと以外に返済の方法がない人もいます。もう一度チャンスが与えられる人もいます。そんな人があなたとの縁で完治するということになる場合もあります。精神的要素のために治らない人もいます。そんな場合は、一時的には快方へ向かつて、また別の症状となつてぶり返すでしょう」

▼次の投書には「大霊の存在を実感するにはどうしたらよいのでしょうか」とあった。これが読み上げられるとシルバーバーチは、間髪を入れず、こう答えた。

「まず第一に、生命の大霊とは何であるかを明確に認識しないといけません。これまでは、それが間違つた概念のもとに信じられてまいりました。

もとより大霊を有限の用語で表現することは、必然的に不可能なことです。無限なる存在を有限なる言語で表現できる道理がありません。そこで、いつの時代においても、神の真の姿は捉え難く、限りある地上の人間の理解力では正しく理解することができませんでした。

しかし皆さんも霊的存在であり、内部に神性の火花を宿しており、程度の問題とはいえ、大霊の資質をそなえているからには、生命の全諸相に顕現している崇高にしてダイナミックな生命力を感じ取ることにはできるはずです。ただし、それにも程度の差はありますが……

そのための条件として、物的感覚を鎮静させること（精神統一）

ができるようにならないといけません。世間の雑音、不協和音、いがみ合い等は、きれいさっぱりと忘れ去らないといけません。内面を穏やかに保ち、あたりを包んでいる崇高な根元的エネルギーに魂をゆだねるコツを身につけないといけません。その段階で内部から湧き出る静寂の醍醐味——それが生命現象の背後の靈力と一体となつた時の実感です。

そこに至るには、時間と忍耐と知識とが必要です。が、あなたのまわりに充滿する靈妙にして微妙な靈的生命のバイブレーションを感じ取ることができるようになるにつれて、内部の靈的自我に潜む驚異的可能性に気づくようになります。それが、大霊の存在を実感することです。しかし、それは容易なことではありません」

▼「花に芳香を与えた力が、ヘビに毒を与えている、という観方もあります」

「わたしに言わせれば、それは少しも問題ではありません。よろしいですか。わたしは大霊があなたの方のいう「善」だけを受けもち、悪魔が「悪」を受けもっている、とは申しておりません」

▼「潜在的には善も悪もすべて、われわれ自身の中に存在しているということですね？」

「人間一人ひとりが小宇宙なのです。あなたもミニチュアの宇宙なのです。潜在的には完全な天使的資質をそなえていると同時に、どう猛な野獣性もそなえております。だからこそ、自分の進むべき方向を選ぶ自由意志が授けられているのです」

▼「地球という惑星も進化しているとおっしゃいましたが、ではなぜ、霊の浄化のためになお苦難と奮闘が必要なのでしょうか」

「人間が無限の存在だからです。一瞬間の間の変化というものは生じません。永い永い進化の旅が続きます。その間には上昇もあれば下降もあり、前進もあれば後退もあります。しかし、そのたびに少しずつ進化していくのです。」

霊の世界では、次の段階への準備が整うと、新しい身体への脱皮のようなものが生じます。ですが、その界層を境界線で仕切られた、固定した平地のように想像してはなりません。次元の異なる生活の場が段階的にいくつかあって、お互いに重なり合い融合し合っているのです。地上世界においても、一応みなさんは地表という同じ物的レベルで生活なさっていますが、霊的には一人ひとりと異なったレベルにあり、その意味では別々の世界に住んでいるとも言えるのです」

▼「心霊的能力の発達は人類進化の次の段階なのでしょうか」

「霊能者とか霊媒と呼ばれている人が進化の先駆けであることに、疑問の余地はありません。進化の梯子の一段上を行く、いわば前衛です。そのうち、心霊能力が人間の当りまえの能力の一部となる時代がきます。地上人類は今、精神的発達の段階を通過しつつあるところです。このあとには、必然的に心霊的発達の段階がきます。」

人間が、五感だけを宇宙との接触の通路としている、哀れな動物ではないことをまず認識しないといけません。五感で知りうる世界は、宇宙のほんの一部です。それは物的手段で認識できるものに限られています。人間は物質を超えた存在です。精神と霊と

で出来ているのです。その精神と霊にはそれなりのバイブレーションがあり、そのバイブレーションに感応する、別の次元の世界が存在します。地上にいる間は物的なバイブレーションで生活しますが、やがて死をへて、より高いバイブレーションの世界が永遠の住処^{すまか}となる日がまいります」

▼「霊界のどこに誰がいるということが簡単にわかるものなのでしょうか」

「霊界にはそういうことが得意な者がおります。そういう霊には簡単にわかります。大ざっぱに分類すれば、他界した霊は、地上へ降りたがっている者と降りたがらない者とに分けられます。降りたがっている霊の場合は、有能な霊媒さえ用意すれば容易に連絡が取れます。しかし降りたがらない霊ですと、どこにいるかは突き止められても、地上と連絡を取るのには容易ではありません。イヤだというのを、無理やりに連れ戻すわけにはいかないからです」

▼別の質問に答えて――

「次のことをよく理解しないといけません。こちらの世界には地上の人間への愛、情愛、愛情、同情といったものをごく自然な形で感じている霊が大勢いるということです。精神的なもの、霊的なものによって結びついている時は、それは実在を基盤とした絆で結びついていることになりました。なぜなら、精神的な力や霊的な力の方が、地上的な縁よりも強烈だからです。たとえば、地上のある画家がすでに他界している巨匠に心酔しているとします。その一念は当然その巨匠に通じ、それを縁として地上圏へ戻って、

何らかの影響力を行使することになります。

もう一つ理解していただきたいのは、地上時代に発揮していた精神的ならびに靈的資質が何であれ、皆さんが“死んで”その肉体を捨ててしまうと、地上時代よりはるかに多くの資質が発揮されはじめるということです。肉体という物質の本質上、どうしても制約的・抑止的に働くものが取り払われるからです。そうやってから、もしも地上に、右の例の画家のように精神的ないし靈的なものを縁としてつながる人が見つければ、その拡張された能力を役立てたいという気持になるものなのです。

その影響力を無意識のうちに受けておられる場合もあります。地上の芸術家はそれを“インスピレーション”と呼んできましたが、それが“靈”から送られていることには気づいておられないようです。つまり、かつて同じ地上で生活したことのある先輩から送られてきているという認識はないようです。

これは、わたしの場合にもいえることです。生命の摂理について皆さんより少しばかり多くのことを学んだわたしが、こうして地上へ戻ってきて、受け入れる用意のある人にお届けしているように、わたしより多くを学んでいる偉大な先輩が、このわたしに働きかけているのです。偉大さの尺度は奉仕的精神の度合にあります。いただくものが多いから偉大なのではなく、与えるものが多いから偉大なのです。

どうか皆さんも、可能なかぎりの美德を地上にもたらすために皆さんを活用しようとしている高級靈の道具である、というよりは、心がけ一つで道具となれる、ということを自覚なさってください。自分が授かっている資質ないしは才能を人類のために捧げたい——苦悩を軽減し、精神を高揚し、不正を改めるための一助と

なりたい、という願望を至上目的とした生き方をしていれば、何一つ恐れるものではありません。

何が起きようと、それによって傷つくようなことはありません。目標を高く掲げ、何ものにも屈しない盤ばんじやく石の決意をもって、“大多数の人々への最大限の徳”をモットーにして仕事に当たれば、それが挫折することは絶対にありません」